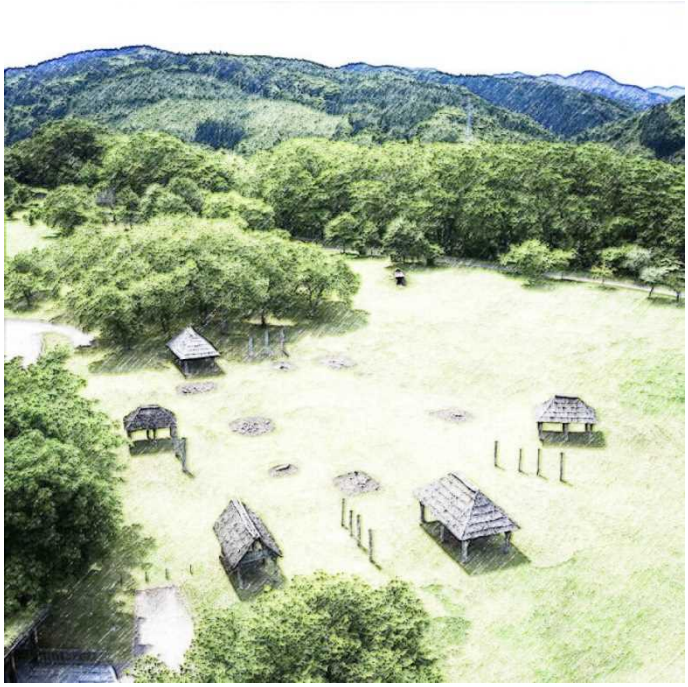
令和４年度一戸町町民ワークショップ

いちのへを楽しむ！
みんなのアイディア集

作：ワークショップ参加者一同



テーマ 子育て支援

取組1 情報の入り口を作ろう

理想の姿

○知りたい情報に対してアクセスしやすく様々な情報を得る環境がある

・知りたい情報にタイムリーに繋がることができる環境が欲しい。
・情報にアクセスしやすい環境が欲しい。
・必要なタイミングで必要な情報を聞きたい、聞くことができる人を知りたい。
・子育てに対して、父親が主体的に色々な情報を得ることができる環境が欲しい。
・子育てを、みんなで情報を共有する入口にする。

現状

○役場に情報はあるが子育て中の人との相互発信、相互共有ではない。

・子育てガイドブックアプリで情報を発信している。知られているかが問題。
・知りたいことを役場に聞きに行きたいが、敷居が高く時間もかかってしまう。

○家族間で情報格差があり、情報の共有ができていないこともある。

・父親が母親の質問に答えることができない。
・昔はおばあちゃんの知恵があった。

アイディア

○子育てガイドブック町民編集委員会をやることで、情報のハブになる

・状況や問題から調べられるガイドブックがあると良い。
・子育てガイドブックを町民全体でつくりあげる町民編集委員会があったら良い。
・子育てガイドブックを知ってもらうためのイベントがあったら良い。
・町民編集委員会を立ち上げた際にも動画、写真などからイメージしやすいように活動実績の細かな詳細を公開する。
・ガイドブックアプリを活用することが当たり前の日常になると良い。
・住民全員にガイドブックを活用してほしい。
・子育てに係る情報を相互にやりとりができるプラットフォームの参加者が分かれば参入のハードルが下がる。
・子育てアプリを男性が入れた場合の入手特典を付け子育てを共有する入り口を作る。
・男性から子育てを行うきっかけを作ることも必要である。

○子育て関係情報や子育ての知恵などの相互発信、情報蓄積の仕組みがあれば良い

・情報収集ができるプラットフォームがあると良い。
・既にあるガイドブックを使いやすいように細分化し逆引きできるようにする。
・情報収集可能なプラットフォームで、楽しそう、幸せそうなイメージを伝える。
・聞きたいことを気軽に聞くことができるコミュニティが欲しい。
・オフィシャルな情報や個人で行っている情報などを発信する発信源を作る。
・寄せられた情報の保管と管理を統一して行うことができるようにしたい。
・SNSやアプリなど幅広く簡単に情報を収集するツールがあったら良い。
・タイミングとターゲットを絞った仕組みがあると良い。
・経験・知識の蓄積ができ、その情報を必要なタイミングで簡単に調べることができる。

取組
2

子育て＝町育て　町民が繋がる場と目指せ「縄文コミュニティ」！

理想の姿

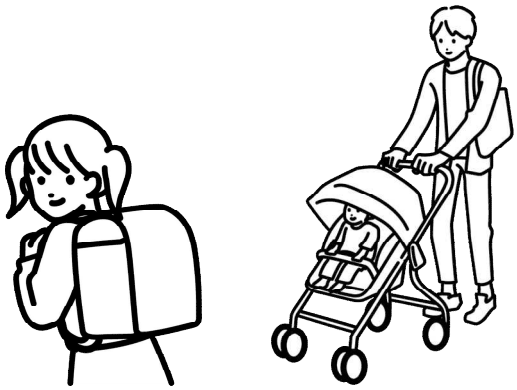
〇一戸町のあらゆる年代の人々が子育てに関与している

・一戸町全員が子育てに関わる。
・住民全体が一生涯子育てをしている意識を持たせたい。
・子どもが大人になった時に高校、大学など子どものための支援をしてきたことを思い出せる環境づくりが必要である。：子どもに恩を売る！（一戸町が）
・一戸にいる本当の意味は何か？一戸町の魅力や誇り、好きだと思ってもらえるような機会や環境を子どもにあげたい。
・魅力や誇りを子どもたちに感じてもらいながら大人になってほしい。

現状

〇子育てや教育に関する現状の仕組みでは理想には届かない

・役割を与えれば参加する父親はいる。
・学校主導のイベントがない。
・個々の親では子育てに限界がある。
・父親が子育てに参加しにくい。
・職の選択肢が少ない。



アイディア

〇様々な支え合い、様々な人との関わりが多発的に普通に行われている一戸町になれば良い

・考える力や選ぶ力を持った子どもが育つ環境をつくる。
・父親が主体となれる、あらゆる場面で父親の役割ができるような仕組みづくりが行われてほしい。
・不要になったもののおゆずり会、親父の会など色々なきっかけで集まる機会が欲しい。
・あらゆる年代の人々が自由に繋がれる仕組みがあったら良い。
・思春期の時に親以外の大人と交流できる場づくりが必要である。
・大人や親が頑張っている姿を見せられる環境をつくる。
・考える力、選ぶ力を養い一戸町内だけでなくもっと広い視野をもつことが必要である。
・子育て支援が終わった後の子どもたちへの支援も必要である。
・父親が子育てに参加できる場が少ない。代表的なものはスポーツイベントなど小学校以上のイベントである。
・父親同士のネットワークがあると子育てに参加しやすい環境になる。
・子どもに対しての予算を多くしてほしい。
・一戸に戻ってきた後にもフォローしてほしい。

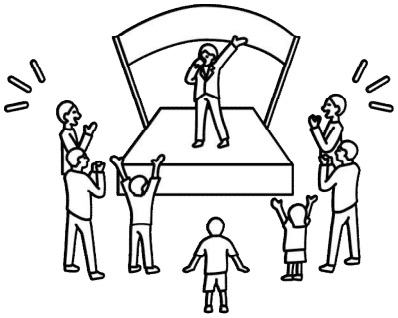
取組1 人が交流する場づくり

理想の姿

○自然発生的に集まる場がある
- まちのことを考えるためにも、気軽に集まれる場が必要である。気軽な場があると仲間が集いやすくなる。
- その場に来た人に気軽に声をかけやすい雰囲気が必要である。

○直接顔を見て交流できる関係がある
- 集まれる場所があれば直接顔を見て交流することができる。

○人々の交流が意見や行動に繋がる



現状

○集まる目的や手段の整理が必要
- 使いたい場所や目的はあるが、どこを使えば良いかわからない。
- 利用できる場所や利用したい人を明確にする必要がある。

○主体となる人がいない
- 今回は町が呼び掛けてくれたから集まれている。町が先導しない場合、場づくりを誰が行うかが課題である。

○町内の集まれる場情報
- 町内のある店で買ったものを持ちこみ、テーブルを囲んで食べながら話せる場所がある。
- 自分のお店でカレーやスパイスの調合などワークショップを開催している人がいる。

アイディア

○場づくり：今ある場を活用する
- ふらっと集まれるような場所があると良い。
- 新たに作らなくても、日常にあるものを活用して場を作り出すことはできる。

○きっかけづくり：店や趣味に応じたイベントを開催する
- 自分のお店で体験イベントを実施している人がいる。このような店が増えると良いと思う。
- 町の施設の一部を開放して、町民が利用できるきっかけを作ると良いと思う。

○きっかけづくり：様々な切り口で集まれる機会をつくる
- 交流できるきっかけがあってほしいと思う。
- 様々な分野や視点の集まりがあれば、誰かはどこかに引っかかるはずである。
- 毎週決められた曜日に交流し意見交換ができるサークルのような場があったら良い。

取組2 情報の発信

理想の姿

○人を集めることができる

・人が交流する場づくりをするためにも、情報発信が大事である。
・情報発信と場所づくりは同時に行われるべきである。

○一人一人に情報を届けることができる

・興味がある人もない人も、情報に一度は目を通して興味を持ってもらう。
・SNSや回覧板等の媒体に関わらず、全員に情報が伝わる方法や仕組みが必要である。

現状

○町の情報発信の状況

・町の広報誌の読み手は年配の人が多い。一人一人にどう伝えるかが重要である。
・町内会の回覧板で情報の共有を行っているが、各家庭全ての人が必ず見るとは限らない。
・図書館のお知らせ掲示板で情報を得ている。参加の意思決定のきっかけになる。
・イベントの開催情報などは口コミで聞いたときは興味が湧きやすい。
・小中高生などの学生は、ホームルームや学内の活動で集まる際に宣伝を行う。学生というターゲットが絞られているため、相性の良い話題を提供することができる。
・一戸駅の周辺に情報を発信する場所があるが見えにくい、早く閉まる、狭いという欠点がある。

○場づくりのための情報発信

・交流する場所やプレミアム商品券などの情報が的確に伝えられていない。
・町の施設でも、利用予約なしで使える場所とそうでない場所を知りたい。

アイディア

○情報発信の拠点

・欲しい情報を得られる発信拠点が必要である。
・コミセンやイコオ、ミニストップ跡のような一戸町の空いている建物など、自由に出入りしやすい場所を活用し情報を発信する。

○道の駅へのアイディア

・観光センターや情報センターを設け、町に関連する情報を町内・町外の人に発信する。
・フリースペースなどで少人数の人が集まり話している中で、他の人も話の輪の中へ入っていける環境を作る。
・オープンスペースでも、目的や対象を明確にイメージするべきである。
・キッズスペースの近くに意見交換できる場を設けることで、子育てする人との間で交流や情報交換をしやすくする。
・交流拠点がストレス解消や相談場所になるだけでなく、関連した人が集まり有志を集めてワークショップへ発展していくことが理想である。
・ホワイトボードや自由に書くことができるスクリーンを用意し、意見交換しやすい環境を設ける。

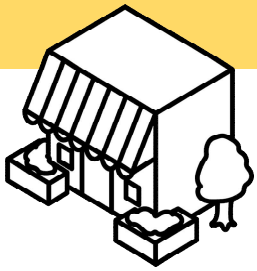
○情報の発信について感想交換

・インスタのハッシュタグ機能のような「情報をまとめるタグ」を作り、一戸情報を発信する際にタグ付けをしてもらう。
・ワークショップ参加者だけでなくもっと色々な人との意見交換が必要である。

テーマ 移住定住・住宅

取組1

一戸町の良さや田舎暮らしの良さに気づく



理想の姿

○地元住民が町の「魅力」を認識している
- 一戸町の「仕事」を「魅力」にしたい。
- 住民が「外部の地域」と「一戸町」の違いについて気づけるようになってほしい。

○町の「魅力」が外部に伝わるような情報発信をしている
- 地元の人と外部の人が繋がれる拠点として活用出来る場が欲しい。
- 住民だからこそ知っている「魅力」スポットを外部に伝えたい。
- 御所野遺跡に来たついでに一戸町の魅力に気づけるシステムが欲しい。
- 「一戸町の住民」にとっての魅力を「一戸町」の魅力として外部に伝えてほしい。

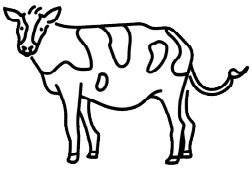
○外部の人と一緒に町の「魅力」を高めている
- 外部の人が一戸町の「魅力」を地域住民に伝える機会が欲しい。

○新たな「魅力」が創出されている
- 御所野遺跡をはじめとした「モノ」としての「魅力」だけでなく、イベントやコミュニティ等の「コト」としての「魅力」がある一戸をつくりたい。

現状

○今あるものの活用不足
- 使用していない建造物を上手く活用できていない。
- 一戸の古民家を活かしきれていない。

○日常生活に隠れた「魅力」に気づけていない人が多い
- 住民にとっての「当たり前」が外部の人にとっては「魅力」となる場合がある。



アイディア

○地元の人と外部の人が繋がれる拠点の創造
- 「道の駅」を情報発信の場とし、若者も協力し、魅力づくりを行う。
- 「昔の暮らし」を体験出来る場をつくって御所野の魅力に繋げる。
- 商店街をはじめとした店舗に観光案内所としての役割を持たせる。
- 地域内の人のアイディアだけでなく、外部の人にアイディアをもらえる機会をつくる。

○魅力の伝え方の工夫
- 町の財産や住民の思いを「言葉」にして周囲に伝える。
- 一戸町で出来る仕事を体験、紹介する事で移住のきっかけをつくる。
- 一戸町の「歴史」、「文化」を魅力として伝える。
- 数値として「魅力」を住民が認識出来るように「幸福度」で他の地域と比較できる仕組みをつくる。
- 多方面の専門家を呼び、「一戸の魅力」を地域住民に伝える場をつくる。
- 鉄道マニア等のコアなファンのニーズにも応えられようイベントを企画する。

○行政と住民の協同プロジェクト
- ウォーカブルな空間を住民と役場が協力してつくる（萬代館周辺など）。
- 地場産業を体験出来るプログラムを企画し、後継者探しと育成を行う事で「一戸の魅力」を守る。

取組
2

コーディネート機能を充実させ、住と職をセットで考える

理想の姿

○移住者の多様なニーズに応えられる環境と仕組みがある

・移住者の個別の生活スタイルに対応した、住宅、仕事のあり方を紹介が出来るシステムが欲しい。
・どんな仕事でも起業しやすい環境にしたい。
・実家に住まなくても、地元に住める環境が欲しい。
・移住希望者が簡単に情報が得られるシステムが欲しい。
・暮らしの相談が出来る窓口が欲しい。

○移住後の地域に溶け込み生活している

・移住後も、地域に溶け込み、安心して生活をするような支援が欲しい。

現状

○「移住・定住」における障害

・住む場所の確保が難しい。
・不動産の情報が圧倒的に少なすぎる。
・「空き家」じゃなくて、そもそも住める場所がないと移住定住出来ない。
・若者が一人暮らし出来る場所が分からない。
・仮住まいのお試し期間が短い。
・農業以外には起業に関しての補助金が出ない。
・「空き家」はすぐに売られる訳ではない、所有者もいる。

○移住コーディネーターの取組

・農業体験を通じて移住者のサポートをしている。（移住コーディネーター）
・移住コーディネーターをしていても、情報が少なく、移住希望者に紹介できない。

アイディア

○「空き家」の活用とその仕組みづくり

・「空き家の所有者」にとってメリットがあると良い。
・住民が知っている「空き家」を、役場の人が知る事が出来る体制を整える。
・「空き家バンク」を活用して、どこに居ても移住先を簡単に探せるシステムをつくる。

○移住・定住を促進させる工夫

・役場のHP以外にも住宅を探せるシステムを作る。
・移住者が来る前に準備出来る事を徹底する。
・移住者のニーズに合わせた案内を出来るようにして、定住化を促進させる。
・移住者の「趣味」や住みたい家の「外観」にマッチする住宅が紹介できるシステムをつくる。
・「お試し期間移住ができる施設の案内」や「現在のお試し移住期間を延長」をする。

○行政主体の取組

・役場の条例を見直す。
・色んな業界の人が介入し、「移住しやすい町」をつくる為のプロジェクトを企画する。
・農業以外にもIT系をはじめとした分野でも補助金を出して、産業振興を図る。
・初期投資が少なくても起業が出来る環境と仕組みをつくる。
・起業の仕方について学ぶ事が出来るプロジェクトを企画する。（例：お試し起業）

○町の遊休資源を活用する

・町の公共施設や公用地で、活用できるものを起業の場等に活用できないか。
・廃校をキャンプ場として活用する等、本来の用途以外での活用方法を検討する。

取組3

組織づくり（役割分担や話し合う場づくりを行う）

理想の姿

〇多様な人が集う意見交流の場が常にある

・町民の声を聞く場がもっと欲しい。
・町民の声が、町全体のまちづくりに繋がっていくようにしたい。
・「今後」の為に「今から」何が必要なのかを「若者」に知ってほしい。

〇意見交換から様々なプロジェクトが生まれている

・移住定住だけではなく、町の様々な問題に対してのプロジェクトを生み出したい。
・役場だけではできないことを、企業や団体、町民が主導で行うものを生み出したい。

現状

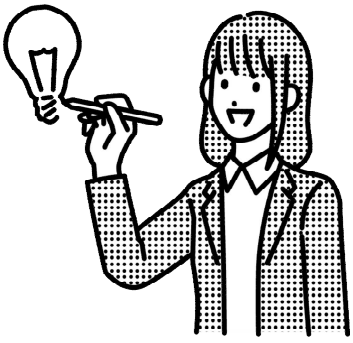
〇役場と町民が一緒になって話し合う場がない

・今回のようなワークショップの場がこれまではなかった。

〇異なる立場間による連携の脆弱性が見られる

・「一戸町」の考えるビジョンと「住民」の考えがすれ違っている。
・「役場」と「議会」で本当に連携が取れているか、機能しているかが疑問である。

アイディア

〇多様なニーズに応えられる環境づくりと組織づくり

・盛岡国際交流センターのような必要な時に必要な支援が受けられる窓口を作る。
・町民と様々な団体が協同してプロジェクトを立ち上げたい。
・人前で話す事が苦手な人でも声を挙げられるようにワークショップ方式が良い。
・役場の仕事を補完するような組織があると、その組織がまちづくりに係る様々な役割を担うことができる。
・情報化が進んだ現代だからこそアナログな伝言板を設置し、多様な世代の多様なニーズを把握出来るようにする。
・多様な世代のニーズを住民同士が共有できる場をつくる。